

朝日時代小説大賞・平茂さん

津山藩絵師「蕙齋」描く

県職員ひらしげんの平茂寛さん(55)は本名・佐藤和久が第3回朝日時代小説大賞(主催・朝日新聞出版、協賛・テレビ朝日)に選ばれ、作品が7日、朝日新聞出版から単行本として発売される。津山の名を全国に、との思いで書いたといい、県内では8日から書店に並ぶ。

作品は、津山藩のお抱え絵師、歛形蕙齋(生年不詳、1824年)を主人公にした「限取絵師」の写真。当時の江戸を航空撮影したかのように描いた



平茂寛さん



「江戸一目図屏風」が、眺めが似ているとして東京スカイツリーに展示されることになった絵師だ。

平茂さんは静岡県出身。1979年、東京農工大を卒業して県職員になった。農業普及指導員として津山、真庭など県北を中心に勤務し、85年から津山市に住む。専門は畜産で、現在は農林水産部耕地課笠岡湾干拓粗飼料基地の副参事を務める。

50歳を前に小説家になりたいと思い立ち、翌日からパソコンで執筆を始めた。「地元・津山を題材とした物語を描くことで、津山や岡山の名が全国に広まればという思いが強かった」。受賞作が3作目だが、出版は初めてという。

県職員、出勤前に執筆 発売

蕙齋はお抱え絵師になっても江戸住まいだったが、生涯でただ一度、1810年から約1年間、津山に滞在した。前年に焼失した津山城本丸御殿の襖絵の制作を命じられたからだ。物語は、老中だった松平定信から別の密命を受けた津山滞在中の活躍を描く。

平茂さんは、津山市が津山城築城400年を記念して発行した「歛形蕙齋」に、定信と蕙齋の秘められた関係を暗示する資料があるのを見つけた。下調べを含めて約8カ月かけ、4000字詰め原稿用紙約250枚の作品に仕上げた。

作品について選考委員の縄田一男さんは「類希なストーリー「テラー」と評し、山本一力さんは「いきなり作品の世界に引き込まれた」と絶賛した。

毎朝3時に起き、出勤までの4時間を執筆にあてている。「大賞受賞はびっくりした。屏風絵がスカイツリーに展示されることになって話題を呼んでいるだけに、とてもうれしい」。授賞式は16日に東京である。

(中村二郎)